

一般部門

走りつづけて

あんどう けんいち
【安藤 憲一・東京都】



入選

父は82歳で亡くなった。肺がんの末期で、わずか1カ月という短い入院生活であったが、今も忘れることのできない光景がある。

見舞いに行った、ある日のことであった。夕暮れ近い部屋は薄暗く、ベッドに近づくと父は眠っていた。体には、何本もの管が付けられていた。

私は口を開けて眠っている、うっすらとひげの生えた痩せた父の顔をのぞき込んだ。だが、父は人の気配に気付かないようだった。私はぼんやりとベッドの傍らに立っていた。

その時、若い看護師が、声を掛けながら入ってきた。すると、それを待っていたように父が目覚めた。

「安藤さん、具合はどう？」

「うん、ずっと走り続けたので疲れちゃって…」

「そう、もう走らなくてもいいのよ。ゆっくり休んでね…」

彼女はそっと父の手に触れながら言った。

「はい」

父の声には、あどけなくまるで幼い子どもが、親や先生に甘えるような響きがあり、目には何かを訴えるような色が浮かんでいた。それは、私が今まで見たこともない父の姿であった。

東北の山村で、村一番と呼ばれた裕福な農家に生まれながら、幼くして実家の没落と両親の死に遭遇し、上京して働きながら夜間中学を出たという父。長じて中国に渡り、豊かに暮らしていたものの、戦後は引き揚げ者として、無一文からの出直しであった。父にとって、その人生は文字通り、走り続けた一生だったと言って良いだろう。混濁してゆく意識の中で、父はもう一度、必死に人生を走っていたのだろうか。看護師へ甘えたように見えたのは、あるいは、はるか昔に亡くした縁薄かった両親のそれだったのかもしれない。

父が亡くなったのは、それから3日後であった。